

があるのか理解に苦しむものである。

我々が命により本島に転進して四十九日目の九月十七日午前五時三十分、猛烈な艦砲射撃ののち、大型輸送船から上陸用舟艇がおろされて上陸をかんこうしてきた。

「安島」警備にあたった我が戦友たちは勇敢に戦い、一度は敵を後退させたが、すべてにまさる米軍は午前九時頃になって上陸に成功した。そして、十月十九日、一か月あまりにわたる激しい戦闘ののち、全員壮絶な玉砕をとげたのである。わずか一個大隊の兵力で米軍の強力な火力と二個師団もの敵を相手に一か月余も戦ったということは、大東亜戦争のなかでもまれにみるものであり、いかに優秀な軍隊であったか語るまでもない。ここに亡き戦友の霊に対し哀悼のまことをさげ、冥福を祈るものである。

## 私の体験記

山口県 小川 佳男

昭和十七年十月一日、現役兵（甲種合格）として入営することがきまった。私の町内に天満宮があった。町内の人達が境内に集まった。私は、皆の前で「行って参ります」と挨拶した。送別者の列は駅まで行進した。駅からは役場の兵事係が山口の歩兵第四十二連隊（当時西部第四部隊とっていた）へ引率してくれた。私は正面の兵舎の七中隊へはいった。

二等兵の教育は、どの隊も皆同じだ。毎日がビンタの連続であった。考えてみると人殺し業の教育だからこの方法が戦争要員養成には一番簡単だったとも思われる。

兵舎には南京虫が多く、はじめは大変なやまされた。私の初年兵教育は軽機関銃だった。したがって、私には軽機と小銃の保管と手入れがあったため、ビンタの原因がしばしばおこった。親にもなぐられ経験がないのに、毎

日、気あいを入れてやると古兵が舎前、舎後に集めて、ピンタをとった。山口の冬は寒かった。

指さきにあか切れが出来て、ボタンを止めるのが非常に痛くて困った。夜中に不寝番をすれば体がひえきって、そのご、眠れなかったことがしばしばだった。私はこのとき、寒冷地は不向きと痛切に感じた。

津和野まで夜間の耐寒訓練があった。雪のなかに腰をおろして休憩すれば、寝てはいけなさと注意を受けるが、すぐ、うとうとと眠った。飯ごうの飯がこおり、箸がおれて食べるのが大変だった。この日、軍馬がおちて死んだと知らされた。

幹部候補生の試験を受けたら甲種に合格、昭和十八年五月十日に久留米第一陸軍予備士官学校へ入校した。同予備士官学校は関東軍直系で奉天にあったものを久留米に移転したと聞いた。久留米は爆弾三勇士の出身地だから軍人精神の訓練にはもってこいだった。予備士官学校の教育はきびしかった。

高良台までかけ足で行き、偽装網を道ばたの草でつくり、ただちに戦闘の演習だった。実弾使用の演習は別府

の裏山の十文字原でやった。一人の死者が出た。また、阿蘇の大矢野原の演習も忘れられない。

この間、学校では銃剣術の教育が盛んであった。私は初年兵教育が軽機だったため、銃剣術はへたであった。したがって演習がおわって帰校すると、ただちに兵舎前に残されて銃剣術の特訓を受けた。おかげで全校の銃剣術大会で準優勝になり、大変なおほめの言葉をいただき、賞状と万年筆をもらった。

卒業のとき、区隊長が私を呼び、教育係として学校に残るようはなされた。私はこの学校の教育が大変きびしかったので残るより第一線へ出動して戦死したほうがよほど楽だと思い、南方第一線小隊長を希望した。区隊長は船が南方の目的地までまともに着くと思っっているのかとほんいをうながされたが、私はだんことして南方第一線を希望し、内地の教育係はおことわりした。そのご、南方燃料廠より理科系の学卒者の要望がきて、私はそのほうへ行くことになった。

昭和十九年一月二十日、門司港よりシンガポール(当時、昭南といっていた)行きの船に乗ることになった。

その際の輸送船団は当時、日本に残っていた二万屯級の国宝船団といわれていた。私の乗った船は「能登丸」で貨物船、横にいた船は「三池丸」で客船だった。「能登丸」は人員を積み込むように内部を改造し、やっと人がよこになれるようになってあった。兵員が多いので、寝返りをするともとの形態にもどることが出来ない状態であった。

私は時間をきめられ、敵の潜水艦の監視をした。船が内地をはなれて行く時、

「ああ堂々の輸送船

さらば祖国よ 栄あれ

遙かに拝む 宮城の

空に誓ったこの決意」

この歌を口づさみ目頭が熱くなった。歌の文句にびつたり的心境だった。そして日は静かに西に沈み、周囲は暗くなっていた。

翌日から船団はジグザクのコースをとり、南へ南へと進んで行った。飛び魚がトンボの群のように海面すれすれに飛ぶのをはじめてみた。友軍の飛行機が一機飛んで

来たのはたのしかった。そのうち、おおしけとなり船はエレベーターの段階をあがったりさがったりするようにゆれだした。多分、台湾海峡へはいった頃と思う。

私は午後十時頃から十一時頃まで対潜監視をしていた。任務を終わって、部屋に帰って横になった。そとは真つくらやみだった。うとうととしていたとき、船が大きくよゆれして目がさめた。船内の電灯は消えた。マイクで

「ただいま、我が船団は敵潜水艦の攻撃を受けつつあり、各人は護衛艦並びに船員の適切なる処置を信頼し、待機すべし」

とアナウンスがあった。この船団の護衛艦は駆潜艇が二隻であった。砲撃が始まった。爆雷の投下も始まった。私は船上に出た。輸送船は暗闇の海を右往左往していた。魚雷が船の近くで爆発する。そのたびに船は大きくゆれた。隣りの船と衝突するのではないかと思われるほど接近したこともあった。

私は船内にもどった。この船の底には火薬類がたくさん積み込んであると聞いていたので、魚雷が命中すれば

「ごうちんだと覚悟をきめてよこになった。爆雷や砲撃の音が消えて行った。」

翌朝、米軍の潜水艦の攻撃はおおしげで闇夜だったので、時限魚雷を撃った。天候がよかつたらおだぶつだったと聞かされた。椰子の木が海辺に美しくならんで立っているのがみえて来た。ついに南に来たと心はおどった。

シンガポールに着いたのは昭和十九年一月二十九日、私達見習士官は南兵営へはいった。翌日、山下將軍とパーシバル將軍の会見したフォード会社の応接室は、当時の机、椅子がそのままにしてあった。シンガポールのおかのうえに昭南神社が出来ていた。参拝して、シンガポール攻略の戦況の説明を聞いた。私も先輩に負けないうよう頑張ろうと深く心にちかった。

南兵営の広場に見習士官たちが集められた。たしか、七列に並べられた。一番右の列はビルマ、二番目はマレー、三番目は北スマトラ、四番目は中スマトラ、五番目は南スマトラ、六番目はジャワ、七番目はボルネオに配属がきまった。私は三番目の列だったので北スマトラ

に行くことになった。

二月八日、シンガポールから汽車でクアラルンプールへ行き、駅前のホテルにとまった。クアラルンプールから車で西方へいき港に着いた。港の沖に中型の船が一隻停泊していた。あの船に乗るのだなあ。と思っていたら、瀬戸内海でよくみるポンポン船がよこづけして来た。この船に乗るとそのままスマトラへ行くと、出航した。私はびっくりした。この船でマラッカ海峡を渡るのかと質問したら、こんな船は敵が攻撃して来ない。もし敵潜水艦が魚雷を撃つて来ても船のしたを通り抜けて安全だと聞かされた。また、現在マラッカ海峡は敵潜水艦の巣だと説明を受けた。

夜は船縁に横になり星空を眺めて眠った。この船はスマトラ島のジャンゲルの間を流れている川へはいつて行った。川を上流へと進んで行く。川岸をみるとワニがいるのでどんなところへ、つれて行かれるのか、興味がわいた。

船は田舎の港、タンジョンバレーに着いた。この日は十九年二月十八日である。上陸すると車が来ていた。車

に乗って着いたところはパンカンランプランタン製油所であった。この製油所は航空燃料の精製を主としていた。私等見習士官はこの製油所内の警備と必要な仕事をする事になった。

ここでは兵科の将校は部隊長（大佐）と大尉一人と私等だけであった。その他は内地より日石、満石、丸善、帝石等から軍属や雇員が来ていた。その他、現地人の従業員や兵補がいた。現地人はここで働く人を採油隊とっていた。私はマレーにいたときは岡兵団であったが、こちらへ来て富兵団にかわった。

私はこの製油所の試験室の仕事を兼務することになった。北スマトラの石油は軽質油であるため粘重度の高い油が出来ない。そこでバームオイルで潤滑油が出来ないか、やってみてくれと依頼された。私は本がないから内地の自宅にある有機科学、無機科学、有機分析、無機分析の本が必要だと申し出たら十日くらいのちに私の手に到着したのにはびっくりした。そこで実験にとりかかった。徹夜で試験をくりかえした。

バームオイルの植物酸の脱酸が困難であった。粘重度

をあげればまた植物酸が出た。ココナツオイルからは、うまくできるがココナツオイルは食用にしなければならなかった。熱帯地での昼夜の実験は体力と精神力を必要とした。

ある日、病院の内田薬局長が来られた。内田薬局長に、シンボルガの倉庫にキナ皮が五十屯あるから、このキナ皮から硫酸キニーネを製造するよう命令が来たといつて来られた。「硫酸キニーネがどうしても出来ない、協力してもらいたい」ということだった。内田さんは学校の先輩だったので、学校の名譽のためにも頑張らねばならない。キナ皮から硫酸キニーネの製造実験にとりかかった。

結果はいがいに簡単だった。最後のこういで炭酸ナトリウムまつを投入して中和すれば結晶が出来た。再結晶を繰り返してきれいな結晶をつくった。内田さんに連絡して大変感謝された。当時、この地方はマラリア患者が非常に多く、マラリアの薬、キニーネが不足していた。学校での勉強が役立ってあんどした。

この頃から夜、敵機が来襲するようになった。この地

方は湿地帯で防空壕には水がたまっており、また蚊がたくさんいるので避難に苦勞させられた。

その頃、石油精製に必要な酸性白土がこなくなった。そこで現地で酸性白土を調達することになり、私にその命令が来た。酸性白土はバタック人種の住む山中にあった。現地よりとりだすために、主計大尉と私と二人で出発し、タルトンという町に連絡所を開設した。

開設が終了すると主計大尉はボルネオに転勤、私はひとり山の中へはいらねばならなかった。私は通訳一人をつれて山のなかの村長の家へ行って、酸性白土の採掘、搬出を依頼した。この村へはいるのに深い谷のうえに丸木吊橋があった。私は橋の途中で軍靴がすべるのでたちおうじょうした。手はつたかずらを持つだけである。土人はハダシでサルのように渡っていく。私は「空をみれば白い雲が流れて行く。したをみればはるか谷底を清水が流れている。ここで転落したらなんのために、ここまで来たのか」と気合いをいれて渡った。軍政部に依頼して酸性白土を運搬できる橋をつくってもらった。

土人達はカゴにいれた酸性白土を頭のうえに載せて道

路まで運搬した。集積所をつくり、そこから現地の自動車で運搬した。酸性白土の搬出、運搬費は石油で支払った。この地方は電気がないので、灯油を渡した。自動車を使用した者にはガソリンで支払った。

この村でひょうがふった。赤道直下のところでもひょうがふるのかと不思議に思った。

タルトン連絡所のまえに郵便隊が駐屯していた。隊長は伍長だった。私は隊員とよく銃剣術をやって体力、気力をつけた。いつでも戦闘部隊に行けるよう心掛けた。

パンカランプランダンが空襲されたと連絡があった。私は本部に直行した。部隊は工場の再建をしていた。同僚に当時の様子を聞いた。

私はふたたびタルトンに引き返し、シャンタル連絡所長として勤務した。シャンタルにはビルマ戦線で敗れた部隊がはいっていた。

その後、敗戦の通知が来た。私は残念で涙が出て仕方がなかった。切腹しようと考えたが本部より書類を焼いてすぐ帰れと連絡してきた。私は涙をかみしめて本部へ帰った。

本部は現地自活体制にはいるために移動中であった。

私は追従して目的地に到着した。そこで部下と一緒に焼畑農業を始めた。早く食料になる芋類をうえた。

部隊長に呼び出され、同僚の少尉のなかの約一割の者に中尉の進級を通知された。私は中尉になり捕虜収容所から捕虜の輸送を命ぜられた。他部隊が捕虜輸送をしていたら現地人の襲撃を受けたため、私の部隊が交代することになった。私は同僚の少尉の教隊を連れて捕虜護衛輸送をおこなった。十日間くらい輸送してまた他部隊と交代した。交代した部隊は現地人の襲撃を受けて武器を全部とられたと聞いた。

この頃よりインドネシア独立運動がかげきになり、その中心は日本軍が養成した現地人兵補であった。彼らは、日本軍は引きあげるのだから兵器を我々にくれ、というのである。連合軍側イギリスは、日本軍の武器解除は嚴重におこなうというので非常に困った。

終戦後再び、インドネシアや独立義勇軍と日本軍の間に武器争奪のたたかいが各地におこった。私は部隊の防衛にあたった。しかし私の部隊への襲撃はなかった。そ

して部隊員は自活生活にもなれてきた。

昭和二十一年三月になって移動のうわさが流れてきた。三月二十五日頃、ベラワンへ移動集結した。食料がないので最後まで持っていた双眼鏡などをパンと交換して、皆と食べてた。

三月二十九日、ベラワン港を出港した。「サラバ、スマトラよ」マングロープの林の島かげがやみに消えて行った。いつも眺めては、内地に思いをはせた。南十字星が頭のうえに輝いていた。

四月一日マレー半島のバドゥバハへ上陸した。最初にあったのが戦犯容疑者の調査であった。私は将校であったため、調査に時間をとられた。無事通過して部隊は鉄道のあるところまで歩かされた。赤道下の日中を歩くのだから非常に苦勞であった。皆生きて帰りたい一心で頑張った。

鉄道には貨車がきていた。ジャブと大きく書かれていた。貨車に乗ってシンガポールのウッドランドでおりた。ここで一番困ったのは便所だった。毎朝、前の湿地帯の中へはいつて用を足すことだった。湿地帯のなかは

悪臭で充満していた。また適当な場所に大便がしてあり、場所をさがすのが大変だった。

その後部隊はチャンギーへうつされた。ゴム林のなかだった。直ちに大型便所を掘った。地面にテントを張って八人くらいがはいった。地面にカップを敷いて寝るのである。スコールがきたら土地が湿って困った。一番困ったのは食料である。一日分ビスケット十二枚が主食で、夕食時配給された。子供のオヤツくらいである。

仕事はチャンギー飛行場の鉄板敷きであった。広大な飛行場へ鉄板を二重に敷くのだからびっくりした。鉄板はなが丸くくりぬいてあった。その鉄板を接続するため鋸を撃って固定するのである。太陽はまうえて輝き、したの鉄板は焼きついて熱く、地下足袋の裏はやわらかくなる。日陰のないところで作業するのだから体力の消耗がはなはだしかった。

「今日も 一日玉の汗

黒き腕よ 髭面よ

兵の寝息も 深かぶかと

チャンギーキャンプの 夜は静か」

の歌が流行した。

そして栄養失調になる者が多くなった。私も体をこわして入院した。

私のはいった部屋に戦犯にされた少尉の人がいた。隣の人が彼にボルネオで捕虜収容所の勤務だったと話した。彼は数日後、チャンギー刑務所で処刑されたと聞き、無念の涙を飲んだ。その頃、シンガポールの新聞には日本軍人の処刑の場面の写真が大きくのっていた。私は一面にのった銃殺の新聞を持って帰りたいと思った。しかし持ち帰ることが出来なかった。

内地へ帰る船へ乗船するよう通知を受けた。

昭和二十一年八月十七日、シンガポールを出発し、九月五日大竹に上陸復員した。

## 死の草原マリンプンよりの生還

和歌山県 脇村 英 一

「いまや八月六日から十五日にいたる十日間は、私達